

サッカースタジアムにおけるコンサート利用の可能性

澤井ゼミ N

○椎原 悠賀 山ノ井 有紀 笠原 啓太 高橋 佑汰

## サッカースタジアムにおけるコンサート利用の可能性

明治大学 澤井和彦演習室

○椎原 悠賀 山ノ井 有紀 笠原 啓太 高橋 佑汰

### 1. 緒言

Jクラブ個別経営情報開示資料（2016年度）によると、Jクラブの収益は、クラブライセンス制度があるので赤字のクラブは減少傾向だが、実際には収益をあげるのに苦勞しているクラブが多数存在するといわれる。Jリーグにかぎらずプロスポーツの収益の柱は入場料収入、スポンサー料収入、放映権料、商品化権料の4つだが、近年はスタジアムをクラブが経営することで収入を上げることが、球団事業の安定化を図るうえで重要であるといわれる（原田、2011）。たとえば、プロ野球では千葉ロッテマリーンズや東北楽天ゴールデンイーグルスのように、球団がスタジアム経営することによって収益構造を改善する事例が増えており、横浜DeNAベイスターズも横浜スタジアムを買収して、球団の収益を向上しようとしている。

一方、現在スタジアム経営をしているJリーグクラブは、鹿島アントラーズとガンバ大阪の2クラブのみである。またJリーグでは、ホームゲームが20試合しかなく（プロ野球は70試合）、スタジアム経営で収益を上げる機会が少ない。このため、スタジアムを多目的、多用途に利用することが、スタジアム経営のポイントになると考えられる。スポーツ庁・経済産業省が2017年6月に提出した「スタジアム・アリーナ改革ガイドブック」においても、「スタジアム・アリーナの集客力や収益性の向上、スタジアム・アリーナによる公益の発現を図るためには、スポーツイベント、コンサート、コンベンション等の多様な利用シーンを実現するための仕様・設備が必要」とされている。

以上のようなことから、私たちはJクラブの経営の安定化とスタジアム経営の健全化を目的に、スタジアムのコンサート利用の現状を調べ、その可能性と課題について検討し、提言したい。

### 2. 研究の方法・結果

#### (1) 調査方法

スタジアム・アリーナに詳しい民間企業担当者1名、プロ野球球団関係者1名へのヒアリング調査、実際にスタジアム設計経験のある建築家1名にメールによるヒアリングと、文献調査を行った。ヒアリングではスタジアム・アリーナの先進事例や傾向、建設運営の手法、後述する芝生問題や騒音問題の具体的な解決方法などについて聞いた。また主にインターネットを用いて関東を中心とした野球場とJ1クラブのホームスタジアムのコンサート利用状況を調査した。

## (2) 調査結果

### ア. コンサート需要の現状

ぴあ総研によると、音楽業界では CD などのソフトの売り上げが伸び悩む一方、コンサートの需要は年々高まっているが、近年、コンサートを行う会場は改修や閉鎖が相次いでおり、ライブ主催者側は会場を探すのに苦労しているという。特に 2016 年には、首都圏のコンサート会場が相次いで改修・休館・閉館したことで、会場不足が深刻化した（ぴあ総研、2016）。

表 1 スタジアムにおけるコンサート利用状況

スタジアム名	収容人数	コンサート開催歴
味の素スタジアム	約50,000人	1年に数回
日産スタジアム	約72,000人	1年に数回
埼玉スタジアム	約63,700人	なし
カシマサッカースタジアム	約40,300人	過去1回
等々力競技場	約35,000人	なし

表 2 野球場におけるコンサート利用状況

球場名	コンサート開催時 収容人数	コンサート開催数 年平均
東京ドーム	約57,000人	約50回
明治神宮野球場	約32,000人	約2回
横浜スタジアム	約30,000人	約3回
西武ドーム	約33,500人	約3回
千葉マリンスタジアム	約30,000人	約1回

### イ. スタジアム・野球場におけるコンサート実施の現状

以上のような状況もあって、サッカースタジアムでコンサートを開催する需要は大いにありそうだが、実際に関東のスタジアムでのコンサート事例を調べてみると、あまり多くないことがわかった（表 1）。一方、野球場では定期的にコンサートが開催されているようである（表 2）。

### ウ. Jリーグスタジアムにおけるコンサート開催の課題

ではなぜ、サッカースタジアムでコンサートが行われないのだろうか。文献調査とヒアリング調査から、サッカースタジアムでのコンサート開催を妨げている問題は、大きく分けて 2 つあると考えられた。

### ① 芝生問題

1 つめは、天然芝の問題である。サッカー競技では芝は重要な要素であるが、ヒアリングによると、日本のサッカー界では天然芝を神聖化する風潮があり、コンサート開催には否定的なクラブが多いという。

### ② 騒音問題

2 つめは、騒音の問題である。オープンエアのサッカースタジアムでは近隣住民からの苦情に配慮してコンサートを自粛するところが多いという。

## 3. 分析

### (1) 芝生対策

以上のような問題に対し、さまざまな情報を収集して検討した。たとえば、芝の問題は「ハイブリッド芝」の導入により、傷みを抑えることが可能である。ハイブリッド芝とは、天然芝に人工繊維をわずかに混ぜることで、強度が向上した芝である。ヒアリングによると、ハイブリッド芝ならランニングコストを天然芝の約半分に抑えられるといい、海外では多くのスタジアムが導入している。日本ではJリーグのクラブライセンス制度のスタジアム基準の改定によって2017シーズンからハイブリッド芝が使用できるようになっているが、まだあまり普及していないのが現状である。ただヒアリングによれば、現在ヴィッセル神戸のホーム「ノエビアスタジアム神戸」のピッチの一部で実験導入されているという。また、カシマスタジアムを運営している鹿島アントラーズではスタジアムの多目的利用を推進しようとしており、その際、空港用地を利用して補修用の芝生を養生し、芝生補修のコストを削減することを検討しているという。

### (2) 騒音対策

騒音の問題は、ヒアリング分散型スピーカーと逆位相スピーカーの活用によって、スタジアム外への音漏れを最小限に抑えることが可能であるという。分散型スピーカーとは、小型のスピーカーを多数配置し、音量を最適化することで、スタジアム外への音漏れを抑えるもので、逆位相スピーカーは、騒音の波形を解析し、逆の波形をぶつけることで、音を相殺するものである。しかし、この2つでは、観客の歓声をコントロールすることにはならない。

## 4. 提言

以上のような分析とディスカッションの結果、本研究ではサッカースタジアムのコンサート利用について、JリーグやJクラブに対して次のような提言を行いたい。

・スタジアム活用に積極的なクラブをロールモデル化する：サッカー界全体的には芝の問題からコンサート利用に消極的であるようだが、ヴィッセル神戸や鹿島アントラーズのように、積極的にスタジアムの多目的利用を図るクラブもある。これらのクラブをリーグが特別指定して、補助金を出すなどしてロールモデルとする。これらのプロジェクトが成功事例になれば、他のクラブが追随し、「芝生神話」を発展的に解体できるかもしれない。

(1) シーズンオフにまとめて開催案：たとえばJリーグのシーズンオフ期間（約3ヶ月）に、コンサートを集中的に開催し、シーズン直前に芝生を張り替えることで芝生の張替を最小限にする。ヒアリングによると、海外のスタジアムではそのような事例がすでに存在するという。

(2) スタジアムの限定利用：たとえばスタジアム全体ではなく、一部を利用してコンサートを開催する。これにより、傷む芝の範囲を最小限にして、コスト削減図れる。オランダのアムステルダムアレナで同様の事例が存在する。また、2013年、日産スタジアムでの「ももいろクローバーZ」のコンサートでは、ピッチにアリーナ席を設けない方法が採用された。アリーナ席がないことを利用した演出などがなされ、注目を集めた。この方法を採用すると、プロジェクトマッピングの演出などが可能になることが考えられる。

(3) 演歌フェス：騒音問題については、たとえば騒音にクレームをつけてくるのは年配の方が多いと仮定すると、たとえば演歌フェスのような中高年齢者向けのコンサート企画は周辺住民の理解を得やすいかもしれない。

サッカーにとって芝生が重要であることは当然だが、ただ「神聖化」してしまうとイノベーションが阻害されてしまう。ビジネスの発展のためには積極的な試みが必要であると考ええる。

#### <参考文献>

- ・原田卓也『スタジアムビジネス』（大坪 正則編著「プロスポーツ経営の実務―収入増大の理論と実践―」創文企画、2011
- ・モデルプレス『ももクロ、日産スタジアム演出は「サッカーとライブ」を融合 初の芝生を活かした演出で度肝を抜く』（<https://mdpr.jp/music/detail/1266380>）（最終アクセス日：9月27日）
- ・ぴあ総研『ライブ・エンタテインメント白書』、2016